九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

20世紀後半におけるウィリアム・ゴールディングと読むことの意味

宮原，一成

https://doi.org/10.15017/1485070

出版情報：九州大学，2014，博士（文学），論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

区分	乙

論文題目

20 世紀後半におけるウィリアム・ゴールディングと読むことの意味

氏　名　　宮原　一成

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、20 世紀後半という時代に作家人生を送った英国人作家ウィリアム・ゴールディングを、同時代における読者中心の読書論の情態のなかに位置づけて検討する試みである。20 世紀読者論と正面から切り結ぶ形でゴールディング作品全体を論じる批評はこれまでほとんど出現しておらず、その意味で本論文は、ゴールディング研究における新局面を開くことを目指すものである。

ニュー・クリティシズムが「作者の意図」の権威を明確に否定して以来、20 世紀の読書論はテクスト中心の姿勢へ、そして、ローゼンブラットらが提唱する読者（とテクストの相互作用）を重視する姿勢へと移っていった。やがて 1967 年にバルトが革命的な「作者の死」宣言を行って、読者とテクスト中心の読書論に強力なスローガンを与え、以後ヤウスやイーザーの受容美学やフィッシュの読者反応理論が 1970 年代の西洋文学界を席巻した。1980 年代後半頃になると、こうした運動は一段落がついた形になったが、読者を中心とする読書論は、諸分野において読む行為を論じる際の共通基盤として今も存在し続けている。

1954 年に小説家デビューを果たし 1991 年に死去したゴールディングのキャリアは、この読者論が高揚し共通認識化していく期間とちょうど重なっている。だが、ゴールディングがその新しい思潮を受け入れて作者という権威の座からすんなり退位し、作品解釈における主役を読者に譲ったのかというと、そうではない。ゴールディングの作家キャリアは、この新しい読者論に対する抵抗や批判と、諦念まじりの受容とのパワー・バランスのなかで、動揺を繰り返した軌跡である。そしてその軌跡は図らずも、当時の読者論が密かに抱え込んでいた《支配・被支配》に関する本質的問題を照らし出す鏡ともなっている。

本論文は、その軌跡の本質を見極めるために、彼の作品群を発表年代順に読む方法は敢えて採らず、読者の問題に関するゴールディングのスタンスの現れ方という特徴によって、作品を 3 つのグループに区分し、そのうえで議論を展開した。

第 1 の作品群は、作者の意図と作者による読者操作とに至上の価値を置く信条が色濃く見える小説によって構成した。『ピンチャー・マーティン』と『蠅の王』と『後継者たち』である。第 2 の作品群には、その信条に揺らぎが生じていることが認められる小説群、すなわち『尖塔』、『ペーパー・メン』、『地の果てまで―海洋三部作』と『可視の闇』を収めた。この 2 群で見られるゴールディングの 2 通りの姿勢が、弁証法的解決を見るのでもなく、ポストモダン的未解決を見るの

でもない、彼独特の「途中で破綻する回心物語（の反復）」という解に向かっていく展開を、第 3 の作品群とした『蠅の王』と『自由落下』そして『二枚の舌』の考察に基づいて立論した。

第 1 群の作品には共通して、読者の視点を拉致して特定の登場人物の眼窩内に拘束するような筆致や、場面切り替えの強力な操作がある。なかでも、「機械仕掛けの神」を登場させるかのような意表を突いた結末（自称「ギミック」）の効果は絶大だ。また同時に、『ピンチャー・マーティン』におけるクリスの視界の描写や、『蠅の王』でラルフが身を隠す草のトンネルからの眺めのように、視界狭窄を具体的に描き出す場面が含まれている点は興味深い。このような、作者の意図によって読者を拘束するというスタンスは、終生ゴールディングが維持し続けたもので、それは、究極の創造者（作者）たる神が人間を創作した意図を何としても究明したい、と願うゴールディングの覚悟にも通じている。

第 2 群の小説の特徴は、「読む行為」の実践者、しかも自分の解釈共同体のコードにだけ合致する解釈を振り回す登場人物を含んでいる点にある。ゴールディングはこの人物たちを、あるときは揶揄的に、またあるときは同情と哀れみを込めて描く。さらに、『ペーパー・メン』は、バルト的「作者の死」というコードに支配された読者たちが読みの柔軟性をかえって失っている状況を浮き彫りにするし、『海洋三部作』は、読者に対するダイアロジックな意識が書き手を支配して翻弄し、書き手（語り手）の信頼性に関する問題を複雑化するというメカニズムを提示している。

第 3 の作品群は、意味を書く側の意図と、意味を読む側の実践とのずれや、ギャップに悩み続ける無限反復について、ゴールディングが見出したと思しき解の可能性を提示する。それは、一度で完結せず不定期反復する回心物語的パターンに身を置くことに、意義を認めるという解である。ずれの発見（読みとり）が、作者にとって一種の「機械仕掛けの神」として機能し、彼を元の意図から無理やり解き放つ。その後、自己の更新（と、その更新作業中に体験するベルクソン的「純粋持続」の感覚）を経た新しい自分という創造者＝神の出現を見ることになる。このパターンの支配下では作者は、その都度よみがえるとはいえ、革命的破壊による「死」を何度も味わわされる。そしてゴールディング作品は、今や意味の創造者となった読み手にも、同様のパターンを体験する覚悟を迫る効果を持つ。そこに、ゴールディングをゴールディングとともに読む意味が存在している。